

『魔法の英語』 発展問題のおもしろさ

—マラソンを走らせながら何を語ったか、あるいは今なら何を語りたいか

寺島美紀子（国際教育総合文化研究所上級研究員、20190909）

L1 「We Speak」 —この課のタイトルは We Speak であってはならない

この『魔法の英語』は、どの課の発展問題も考えさせられることが多く、その物語を読み解く上で、「なるほどそうか」と思わせられるところが多々あります。

たとえば、いちばん初めの L1 の発展問題を考えただけでも、この『魔法の英語』をぜひやってみてみたいと思うようになること請け合いなのです。前田健次さんの西尾高校の生徒も「この L1 をやっただけで、あとの課をやる気が出た」という意味のことを言ってくれたそうです。

この L1 「We Speak」と題されている課は、たった 6 行しかない文章に対して、発展問題では次の 3 つの問いが設定されています。

- (1) 「1～4 行目の文を人間の発達の順序に並べかえなさい。」
- (2) 「1～4 の文の中で最も大切な文はどれですか。」
- (3) 「4 行目と 5 行目の文の間が 1 行あいているのはなぜですか。」

L1 の文章は以下の通りです。

We speak.
We walk on two legs.
We use fire.
And we can choose.

We can choose our way of life.
We can make our own future.

この『魔法の英語』（そしてその原本になっている三友社出版の高校英語教科書『World I』）は英語の教科書なので、これを読む生徒や学生たちは、(2) の問い「1～4 の文の中で最も大切な文はどれですか」の答えとして、1 番目の文 We speak. を選びがちです。

しかし、(1) の問い「1～4 行目の文を人間の発展問題の順序に並べかえなさい」を考えたあとでは、「待て待て、ちょっと違うぞ」と思い始めるのです。

(1) の問いは、「人間の発達の順序」「類人猿から人間になる過程」のことを問うています。

初めは樹上だけで生活していた類人猿が、食糧確保の要求からか木から下り、まず二本足で立つことができるようになった。それによって、かつては足であった前足が、歩く必要性から解放されて手へと進化する。

しかし他方、前足が手へと進化して、火を使い始めたことによって、逆に脳が鍛えられた。こうして「手は突き出た脳」の言葉どおり、脳が耕された。

（ちなみに、この「手は突き出た脳だ」という言葉は、さくらさんらんぼ保育園の斉藤公子

さんのものです。この保育園で、かつて夏の1週間で学ばせてもらいましたが、さくらさくらんぼは他の保育園のように文字指導や英語教育はぜったいにしない。たとえ知恵遅れや精神・身体障害がある子どもでも、絵を描いたり泥んこ遊びをしながら手を鍛えることによって、確実に脳が鍛えられる。だから小学校に入ったときは他の保育園出身の児童のように文字の読み書きはできないが、すぐに他の児童を追い抜くほど成績も上がるという。)

安全な樹上ではなく、平原で暮らす必要から、猛獣の襲撃を逃れるために集団で生活し始めたことによって、次第に「話す」必要が生まれた。しかし、これも「耕された脳」が言葉を生み出したからこそであったのだ。

こうして人間になった後になって、ようやく、「どう生きるか」という「選ぶ」という段階に至る、というわけなのです。

ですから問(2)「1～4の文の中で最も大切な文はどれですか」の答えは、人間として如何に生きるかに関わる4番目の文 **We can choose.** となります。

もちろん、猿から人間になるためには、まず必要なのが二本足で立つことだったわけですから、その出発点となる2つめの文 **We walk on two legs.** という選択肢もあり得るわけですが、1～4行の後につづく2行が、その答えを明示していると思われます。出発点が **We walk on two legs.** であり、到着点が **We can choose.** なのです。

ですから、問(3)「4行目と5行目の文の間が1行あいているのはなぜですか」の答えは、次のようになるでしょう。

「下の2行の文は、上の4文のなかで一番重要な文 **We can choose.** をより具体的に説明した文である。人間の発達の順序を説明した上の4文とは、全く性質が違う文だから」

だからこのL1のタイトルは決して **We Speak** であってはならない。出発点の **We walk on two legs.** か、到着点の **We can choose.** でなければならないのです。

私は学生たちに「この短い文にはね、これからのあなたたちの最も重要なことが書かれていることがわかりますよね」と、いつも言うのです。

あなたたちはこれから先、卒業したら、どんな職に就こうか、いや、どの就職先に決めようか選ばなければならない。もちろん今までだって、選んできたわけです。どの部活に入ろうか、どの大学に入ろうか、・・・と。高校のとき野球部に入ったから朝日大学に入ることになったのかも知れないし、剣道部だったからかも知れない。運動部に入らなかったら、また別の道があったかも知れない。いやもっと身近な例を取れば、どのゼミを選択するか、どの授業を選択するか、あるいは、それを落とすか取るか、という選択もあり得るわけです。

人生はいつも、どちらに行くか、どれを選ぶかによって、全く変わってしまう。右に行くか左に行くか。人は道を進んでいくとき、必ずクロスロード(十字路)に立ち、どちらを目指すかを選ばなければならない。道は2つにひとつか、3つにひとつかも知れないが、必ずひとつを選ばなければならない。だから「岐路」と言うんですね。結婚もそうです。どんな人を選ぶか、あるいは好きな人が複数いたとしても、どの人を選ぶか。それによって人生は大きく変わるのですよ、と。

だからこそ、「選ぶ」ということが、人間にとって最も大切なことになったのですよね。

今回の参院選挙でもそうです。朝日新聞の多事奏論「れいわ旋風 心からの言葉、だから刺さった」の書き出しは次のように始まっていました。「選挙の街頭演説を聞いて涙を流す人を見るのは珍しい。参院選投開票前日の7月20日夜、東京郊外の多摩センター駅前であつたれ

いわ新選組の演説でのことだ。」

いまだ約半数の人が「選ぶ」ということを放棄してしまっているのに、与党過半数となっただけでしたが、それでも自民党の圧勝とはなりません。いまだ、わずかではありまじょうが、「選ぶ」ことを始めたひとたちが、「選んで」投票に足を向けたことによって、これまでは政党でなかった団体「れいわ新撰組」が政党要件を満たすほどの得票を得たのではないのでしょうか、と。

この短い、たった 6 行しかない文章だけれども、この文章は、あなたの人生で何が一番重要なことなのか、つまり、自分で自分の人生を選び取ることが一番重要なのだということを教えてくれる、そんな文章なのではないのでしょうか、と。

こんな風に、そのときどきの話題も交えつつ話していくと、学生たちは、「へえー、短いけれど、なかなか深いんだねえ」と言ってくれます。前田さんの生徒もそれを感じ取ってくれたのではないのでしょうか。

こんなふうに、「発展問題」をやりながら、ひとつの物語を読み進んでいくと、非常に簡単な英文で構成されていると思われた『魔法の英語』が、なかなか読み応えのあるテキストだということが見えてきて、とてもおもしろいのです。(ただすべてのセクションに発展問題が入れられていないことが残念なのですが・・・)

L2 「Where Are You From?」 —世界地図の読めない若者たち

この課の問いには、普通とは違う世界地図が載せられていて、登場人物たちの出身地を書き込む欄が設定されています。ほとんどの学生がこの世界地図を埋められないことを発見してしまいます。留学生、とくに中国から来た留学生は世界地図で出身地を指さすことさえできないことがほとんどでしたが、今では日本人も全く変わらなくなってきました。

L3 「My Dream」 —虎刈りにされてもいいの？

この課の問いは、「a good English speaking barbar とは次のどんな床屋さんだと思いますか。1. 英語の上手な床屋、2. 腕の良い床屋、3. その他」というものです。

自分の夢がこういう床屋になることだ、という一節についての問いなのですが、たいていの学生は 1 番という答えを選びます。これに対して私は「あなたなら、英語だけ上手な床屋に行きたい？じゃあ、虎刈りにされてもいいんですね？」と聞きます。

L4 「Sound of Music」 —この歌の 1 行 1 行が、苦しかった私の人生そのもの

この課は、Climb Every Mountain という歌が載せられていて、問い (1) 「この歌は聴く人に何を訴えようとしているのですか。(主題よみ)」という問いが載せられています。

この問に対して、福岡の市川英子さん(主婦)は「この歌の 1 行 1 行が、苦しかった私の人生そのものです」「今ようやく自分の生きる夢が見つけれられましたから」「『魔法の英語』はこれからの私の生きる糧」と語ってくださいました。彼女はこの歌を紙に書き写して、自宅の

台所の壁に貼って、毎日眺めて歌っているそうです。

Climb every mountain, Search high and low. Follow every byway, Every path you know.	すべての山を登れ、 高いところも低いところも探れ すべての脇道をたどれ、 あなたの知っているすべての小道を
--	--

Climb every mountain, Ford every stream. Follow every rainbow, Till you find your dream.	すべての山を登れ、 すべての小川を渡れ、 すべての虹を追いかける、 あなたの夢を見つけるまでは
---	--

もともと映画『Sound of Music』の中でも、波瀾万丈のストーリー展開のなかで歌われる歌で、「この歌の 1 行 1 行が、苦しかった私たちの人生そのもの」「今ようやく自分の生きる夢が見つけた」そんな歌なのです。

母を亡くして陰気だったトラップ一家に、家庭教師として入ったマリアが、歌を通して子どもたちを豊かに成長させたことで、トラップ大佐と結婚します。こうして、ようやく幸せをつかんだ家族となったのですが、大佐がヒトラー政権に反旗を翻したということで、ヒトラー政権から追われる身となってしまいます。しかし機転を利かせて合唱コンクールの受賞式直前にようやく逃げ出し、山や谷を越えて新天地へ向かう。これは、そういう場面で歌われている歌なのです。

私自身は、この歌の美しさやこの映画のストーリー展開を、映画のなかの歌や話、歴史的な事実のなかでの歌や話として、単純に感動的だなあ、とずっと考えてきたのでした。しかし市川英子さんの話をうかがったあとでは、「そうなのか、もっと自分に引きつけてこの歌や映画を感じると、そういうことになるのか」と、改めてこの歌の意味を感じ取ることができたわけです。

問い (2) は「この歌の反復と対比を指摘しなさい。(形象よみ)」です。この、「歌の反復と対比、脚韻」が見えるようになると、英語の歌が何倍も楽しめるようになります。近年、ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランの歌も、歌詞は難解で意味深いという理由でノーベル文学賞になったのですが、しかしボブ・ディランは、単に「反復と対比、脚韻」という言葉遊びを楽しんだだけだったのではないかと、寺島隆吉は述べています。英語の歌における「反復と対比、脚韻」がいかに重要な位置を占めているかを物語っていますね。

L5 「An angel on a skateboard」 —あなたなら自分の思いをどう書く？

この課のセクション 2 の問いは、次のようになっていました。

(1) 「ケニーはなぜ足がなくても誇りを持っているのだと思いますか。」

(2) 「この話の題名は、ケニーに対してこの文の作者がどんな思いを持っていることを示していますか。」

ケニーは腰から下がすべて切り取られてしまって、足もお尻も腰すら無い少年なのです。ケニーの写真を見て、私は、これが本当に現実に生きている人なのかと、胸が張り裂けるほど驚

いてしまいました。上の 2 つの問いにどう答えるか、日本語でどのようにきちんと自分の思いを書くことができるかが試される問いだと思います。

L6 「Little Prince」—売りつける方が悪いのか、売りつけられる方が悪いのか？

なぜ L6 のセクション 3 を次の時間に回すほうが良いと考えたのか？

表 4 の授業日を見ると、L6 はセクションの 1 と 2 までを 5 月 11 日にやり、セクション 3 を次の 5 月 18 日にやっています。ひとつの課はなるべく 1 コマの授業でまとめてやらせたい、つまり、ひとつの物語としてまとめて読ませたい、そういう思いがありながら、なぜ L6 のセクション 3 だけは次の授業日に切り分けたのでしょうか。

5 月 11 日に L5 の 2 頁と L6 の 3 頁を合わせて 5 頁分も 1 コマにやらせるのでは、いかにも頁数が多くなりすぎるということも、もちろんあります。しかし、L6 は Little Prince の課であり、そのセクション 3 の発展問題が難解なのです。

発展問題が難解だと書きましたが、Little Prince という物語自体が、どの小話も理解するのがとても難しいのですが、とくにこの課で取り上げられている小話は難解です。

だから、発展問題までを生徒や学生に考えさせようとする、どうしても特別に時間をとって説明しなければならない、と考えたからです。

この L6 の話は、星の王子さまに、ある商人が「1 粒この錠剤を飲めば 1 週間も喉が渴かず、1 週間で 53 分の時間が節約できる」と言って錠剤を売りつけようとするのですが、星の王子さまは「その 53 分があったら、小川に水を飲みに行くよ」と返事をする、というものです。

それで、このセクション 3 の発展問題は以下のようなものです。

(1) 「なぜ 53 分という数字にしたのだと思いますか。」

(2) 「この物語は何を訴えているのだと思いますか。」

どうでしょうか、英語教師ですら、この問いにすぐに答えられるひとは、ひょっとしていないのではないのでしょうか。

ですから、この課のセクション 3 だけは、特別に時間を割いて説明する必要を感じた訳で、だからこそ、次の時間にまわしたほうが良いと考えたのでした。

53 分の説明は、「不要なものでも売りつけることができるのが商売人というものである」ということを物語っています（実際に大学のマーケティングの授業ではそう教えられているというので、いまさらながら驚きましたが）。

ですから、それに対して消費者である私たちは、そういう口車に乗せられない、したたかな見目を持つ必要があるようです。しかし我が家も、こうした上手い広告宣伝・口車に乗せられて私が喜々として(?) 買い集めた不要品が山積し、困っているのです。

この意味でこれは「数字の魔力」ということも物語っています。人は数字というものにだまされやすい。具体的な数字を出されると、ひとは、つい、その話の内容が本当のことだと信じてしまうものではないのでしょうか。

アメリカは 1950 年代、マッカーシズムが吹き荒れました。共産主義的思想を取り締まる、いわゆる「赤狩り」です。当時のアメリカでは、共産党や社会主義にたいする共感・ソ連への

親近感が広まっていました。と同時に、「同情・共感」という人間の基礎をなす感情や「連帯と団結」のムードが、当時のアメリカでは映画界や言論界に満ちてきていたので、それへの攻撃をすることで、人々を恐怖に陥れ、人々を支配する、というものでした。

しかしこの出発点が、共和党右派のジョセフ・マッカーシー上院議員が「政府職員の中に 59 人？の共産党員がいる」と、具体的な「59 人？という数字」を挙げた発言だったのです。

今、トランプ大統領は、大統領選挙のときに「ロシアが裏でトランプを支援した」「トランプはプーチンの傀儡（かいらい）・操り人形だ」ということで非難され続けています。アメリカが自国の政治を維持するために「共産主義者」や「ソ連のスパイ」を利用するのは、なにも現在のトランプ政権のときだけではないのです。アメリカ史を紐解けば、歴史のどの時点でもつねに、それしか無かったことが分かるのです。

それはともかく、マッカーシーが具体的な「59 人？という数字」を挙げた発言からマッカーシズムが始まったのです。「数字の魔力」と言わず何と言えればいいのでしょうか。ちなみに、『統計でウソをつく法』（ダレル・ハフ）という題名の本すらあるのです。

L7 「Siebold and Otaksa」 — オランダに、紫陽花は「お持ち帰り」したが、お滝は「お持ち帰り」しなかった

この課のセクション 2「発展問題」は、「「おたき」→「オタクサ」と音声変化する過程を説明しなさい。」

セクション 4 では「全文から、シーボルトに関するエピソードを 3 つ以上列挙しなさい。」という発展問題です。

音声変化をするのは何も英語だけではなくありません。日本語でも「こんにちは」→「こんちわ」→「ちわ」とか、「母さん」→「お母さん」→「おっかあ」のように、さまざまに音声変化しますから、そこから類推して考えてみるということです。

滝→（丁寧語の「お」を付けて）お滝→（「さん」を付けて）おタキさん→（「キ」が「ク」に変化して）オタクサン→（「ン」が消えて）オタクサ

このシーボルトの話は、紫陽花の学名「オタクサ」の生まれた所以を説明する有名な話なのですが、学生たちの多くが英文を読んで訳したはずなのに、「シーボルトに関するエピソードとして 3 つ以上」抜き出すことができないことを発見するのです。

ところでシーボルトは、紫陽花をオランダに持ち帰って、妻の名に因んで「オタクサ」という学名を付けたというので、今でも日本におけるシーボルトの評価はとても高いのがあります。「なんとまあ、妻思いの夫だろうか」「なんとまあ、素敵な話ではないか」と。

毎年、朝日大学で英語弁論大会が開かれますが、私がガーデニングをやっているというのを知ってか、そういうときの審査員室でもよく話題になったのがこのシーボルトと紫陽花の学名のエピソードでした。そして娘は日本初の女医となった云々……。

私のいちばん好きな花、日本の最も美しい花のひとつである紫陽花を、シーボルトはオランダに「お持ち帰り」したのでしたが、しかし、日本妻お滝さんは「お持ち帰り」しなかったのです。蝶々夫人しかり、です。

日本人は何とお人好みな国民なのでしょうか。いまだにシーボルトをありがたがっているのですから。

話はどこまでも続いてしまいますが、たとえば、朝日大の英語の外人講師ですが、日本で日本人と結婚している人がほとんどです。日本人と結婚すれば日本国籍がすぐに手に入るから、日本に来たらまずお相手を探すのが仕事なのです。これは男女を問わずです。

おまけに、日本人女性は白人男性にめっぽう弱い。外国人とくに白人にとっては、英語さえできれば結婚相手についても仕事についても容易に見つけることができる（日本は白人天国ですから）。

しかし事情で母国に帰ってしまう人もいます。そういうとき、ほとんどがシーボルトになってしまうのです。

あるいは、結婚していなければ尚更のこと、お国で何か事変が起きると、大学の授業などほったらかして、お国に帰ってしまうのです。

そういうときの素早さにはびっくり仰天させられます。帰るとも言わず、授業記録も残さず、期末試験もせず、あるいは成績も出さず、勝手に帰ってしまうのです。突然失踪です。

「西洋は日本と違って契約社会だ」とよく言われます。日本人のような何でも曖昧にする人種とは違って、西洋人は契約精神が強いのだと。

しかし私自身はこれまでの幾つかの実例を通して、西洋人は契約意識が低いからこそ文書による契約で縛らなければならないのだと考えるようになりました。

それに比べると中国人やベトナム人などのアジア人種は、巷の評価とは異なり、仁義に厚く、いつまでも礼を忘れず・・・と、日本人と共通するメンタリティを有していることを実感するのです。

L8 「Pictures Speak」 — 「画家は絵を描くだけの存在ではない。語るべきこと無くしていったい何を描くというのか」

この章はスペインの有名な芸術家パブロ・ピカソの描いた 1 枚の絵を解説する説明文なのですが、タイトルには Pictures という複数形が使われていて、一瞬、あれっ、と思わせられるものです。最初から最後までピカソの描いた 1 枚の絵のことが語られているのに、なぜ Pictures なのか。なぜ A Picture Speak ではいけなかったのか。

それはともかく、赤ん坊を抱く、異様なほどに大きな腕や手と大きな体を持つ大きな母が赤ん坊を見つめ、赤ん坊がこれもまた異様に大きな手を母に差し出している。その 2 人が、大地と海と空とが横に 3 分割された画面のなかに配置されている。異様に強烈な印象を放つ絵です。そして、この絵でピカソは何を語ろうとしているのか、という問いが発せられています。

まず英語の本文を載せます。

- セクション 1 ① This picture was painted by Pablo Picasso, a famous Spanish artist.
② He painted a large mother who is looking at her child. Her strong arms are supporting her child, and the child is raising an arm toward her.
- セクション 2 ③ In the background Picasso painted the three things that make up the world – the land, the sea, and the sky.
- セクション 3 ④ What did Picasso want to tell you at this picture?
⑤ Look at this picture not only with your eyes but also with your heart and imagination.

セクション 3 の問 (1) は「この課の英文は説明的文章なので、全体を全文・本文・後文の 3 つに分けてみると、文の主旨がよく分かります。①-⑤ の段落を大きく 3 つに分けなさい。」

問 (2) は「④の問に対してあなたならどう答えますか。」
というものです。

上記のようにセクション 1 が ①と ②の段落、セクション 2 が ③の段落、セクション 3 が ④と ⑤の段落になっています。これを 3 つに分けなさいと言われると、ついセクション分けのまま、つまり ①と ②、③、④と ⑤という 3 分割にしてしまいがちです。

しかし、①が導入、②と ③が絵の解説、④と ⑤が疑問とその答えを導き出す文という構成です。したがって、前文 ①、本文 ②と ③、後文 ④と ⑤、が答えとなるでしょう。

一般に教科書は、内容の切れの度合いによってというよりも、主として 1 時間の授業で進める文章の量によって、配分が決められることが多いのです。内容で切るか、分量で切るかと言えば、分量で切るということなのです。

しかし、そもそも文章の構造、いわゆる「構造読み」という観点を教科書編集者たちが持ち合わせていないので、それに基づいたセクション分けをできないのは当然でしょう。ですから、そういう文章を読まされる生徒の方が混乱する、あるいは教師の方も混乱する、これなどその良い例です。だからこそ、このような問いを設定する必要があるわけなのです。

もちろん教師の方も、セクション分けになっているからと言って、そこが文章の構造上の切れであるとは、ゆめゆめ判断してはならないのです。『魔法の英語』も教科書『World I』を元にしていて、かつマラソン・プリント用にさらに細分化していますので、セクション分けは文章の構造とは無関係になっています。

ところで、「画家は絵を描くだけの存在だと思われているが、そうではない。語るべきこと無くしていったい何を描くというのか」という意味のことをピカソは語っています。

その最たるものが「ゲルニカ」だと言えるでしょう。スペイン内戦中の 1937 年にピカソが描いた絵画で、ドイツ空軍によってバスク地方の小都市ゲルニカが受けた都市無差別爆撃（ゲルニカ爆撃）を主題とし、反戦平和の象徴的な絵と言えるものです。

当時パリ万博で公開され、スペインがフランコ政権下にあったときは、ピカソがフランコのスペインに「ゲルニカ」を渡すことは許さないと言って、ニューヨーク近代美術館に暫定的に保管されていました。

が、現在はスペインに返還されています。国連ビルの廊下に架けられているのは「ゲルニカ」のレプリカなのでしょう。国連に関するニュースに「ゲルニカ」を背にした写真が載せられることが多いです。

ピカソと言えば「ゲルニカ」が有名ですが、ピカソほど、生涯の間にその作風をくるくるめまぐるしく変えた芸術家はいません。

モネといえば印象派、モネの池などでもご存じの方が多いでしょう。大胆な色使いのゴッホ、ゴーギャン、マネ、セザンヌ、マティス、ダリ、マティス、ムンク、カンジンスキー・・・どの画家も素晴らしいが、ピカソほど絵を実験場にした人物はいませんでした。

青の時代、バラ色の時代、アフリカ彫刻の時代を経て、人をびっくり仰天させたキュビズムの時代（これも 3 時代ほどありました）、新古典主義の時代、ゲルニカの時代、シュルレアリ

スム（超現実主義）の時代、晩年の時代です。ピカソほど「芸術とは破壊である」を実践した人物はいないので。

普通の画家なら一生をかけて自分の作風をひとつ作り上げ、それをもってして一生を終えるのですが、ピカソは自分が作り上げた作風をいとも簡単に破壊し、その破壊を超えて次の作風を生み出す、それを繰り返していくのです。

新古典主義の時代には、妻オルガと息子パウロをモデルに、どっしりと量感のある母子像をずいぶん描いているのですが、L8の絵はその中の1枚ということになります。「英雄色を好む」と言われますが、ピカソも、作風をクルクル変えたように、恋人や愛人や結婚を次々と変えています。

でも、流石に息子パウロが生まれたことに感動したのか、この時期はパウロの絵とか大きな母子像の絵ばかりを描いています。（でも数年で17歳のマリー・テレーズと出会い、娘マヤが生まれます。）

したがって問(2)「4」の問いに対してあなたならどう答えますか」には、絵は目だけでなく、見る人の心と想像力で自由に見てください、と言っているわけですから、ピカソがこの絵で言いたかったことも正解があるというわけではありません。だから、私なら次のように答えることになるでしょうか。

「絵のほとんど全体に大きな母子像を置き、母子の絆のすばらしさを強調し、その背後に母子像を包み込むように大地と海と空の3つを配した。」

「中でも海がとくに大きく描かれているのは、海こそ生命の根源であるというピカソの意識が反映されているのではないか。」

「私にとって赤ん坊は奇跡だ！偉大だ！それを産む母親は奇跡だ！偉大だ！それを生み出す大地や海や空は奇跡だ！偉大だ！」

そんな風に叫んでいるピカソの声が聞こえそうな絵ではないでしょうか。

L9 「The Mother of Woods」 — 森がなかったら未来の日本はどうなる？

この課は会話で構成されています。会話体のテキストの読みにくさについて一言。

まず、L8と同様にセクション分けの位置が大変悪い。たとえばセクション2は文頭に *Oh, I didn't know that.* という文が出てくる。これでは、*that* の意味が分からなくなります。

これと同じことがセクション4の文頭 *That's right.* や、セクション5の *Right.* や、セクション6の文頭 *That's true in England.* でも起こります。

会話体がセクションで切られ、頁の文頭に指示語の *that* が出ているので、必ず前のセクションへ戻ってみなければ、そこに出てくる *that* が何のことかは答えられない。

またセクション3の文頭には *Yes, it does.* が出てくる。これを初見で「関係があるよ」とは誰も訳せない。前頁の会話は *Does the rice have anything to do with beech trees?* となっているのですが。

これらは、この課が会話体であることとセクション分けの仕方の2つによって、わかりにくさをより強めているのです。

このような会話体の場合、*Oh, I didn't know that.* や *Yes, it does.* や *That's right.* や *Right.* や *That's true in England.* といった、前の会話を受ける「合いの手」として、文は最低でも

セクションの終わりに置き、次のセクションからはもう一度その人物が改めて語り始めるという会話文にしてもらえると、読み手にはやさしいものとなると思われます。

そもそも会話文というのは、一種の戯曲のようなものです。会話体だけで、その場の状況や語り手がどんな人物かを読み込むことができるようになるのは至難の業です。だから散文で書かれている小説よりも、会話体で書かれる戯曲の方が格段に読むのがむずかしいわけです。説明文がなく、いきなりその人たちだけの会話で物語を読み込んでいかねばならないからです。

この L9 の 2 人は、トシオが Here in Miyagi... と言って解説を縷々しているわけですから宮城県の高校生かなと思われます。リンダは That's true in England. と言っていますから、イギリスから宮城の高校に来ている留学生という設定なのでしょうか。それ以上の個人的な関係はいつさい出てきません。

なにか説明があれば面白いのですが何もありません。トシオがなぜブナ林に関心があり、水田や洪水の説明をしたかったのか、なぜ美しくかつ動植物を産み育てる舟形山を誇りに思っていて自慢したかったのか、は語られません。

イギリス人のリンダは、「あーら、イギリスだって同じよ。だからブナのことを森の母って言うのよ」と言い返します。だからセクション 1 では、イギリスにもブナの木があり、だから beech は book の語源だ、とリンダは紹介したのでしょう。

それはともかく、この課から埋め込み文が急に多く出てきて、しかもそれが文頭副詞や主語にあるという最も難解な形なので、難易度が急に上がります。セクション 3 は埋め込み文が連続して出てきます。

セクション 1 In early times [when people had no paper] , they scratched letters on the bark of a beech.

セクション 3 The rain [that falls on beech forests] sinks into the sponzy ground. The water stays in the ground and flows into the paddies [where sasanishiki rice is grown] .

そして上の文の後、セクション 4 は That's right. A beech forest is also useful for preventing floods. となっています。

ここでようやく発展問題についてです。セクション 4 の発展問題は「A beech forest is also useful... とあるが、他のどんな点でブナの森は有益なのですか。」となっています。

この also には「もまた」という訳語が書かれているのですが、今年の夏の宿泊セミナーのときの前田さんの発言にもあったように、生徒は主語にそのまま「もまた」をくっつけて訳してしまいがちで、「もまた」をどう処理するかによって意味が激変します。

× ブナの森もまた洪水を防ぐのに有益です。

○ ブナの森はまた洪水を防ぐのにも有益です。

「ブナの森もまた」では、話が逆転してしまいます。しかし訳し間違えたとしても、発展問題にきて「他のどんな点でブナの森は有益なのですか」となっているので、ここで軌道修正が可能でしょうか。

答えは、「洪水を防ぐ」ではなく、「おいしい米が育つように水を貯めておく」となります。

またセクション5の発展問題 (1)

「Here in Miyagi beech forests once covered...とあることから、現在はどうなっていると思いますか。」

これはセクション4とともに副詞がどのような働きをしているかを下線で示して問うています。これは「かつては・・・だった。今は」というので、「ブナの森が減ってきている」と答えられる率が高い。

次の問 (2) は「これまで述べられたブナの森の役割を列挙しなさい」となっています。解答例は「おいしい米が育つのを助ける。洪水を防ぐ。美しい景色をつくる。動植物にとって快適な住処をつくる。」となっていますが、「動植物にとって快適な住処」というのは、「人間にとっても快適な住処」なのです。

森があってこそ水田、森があってこそ平安、森があってこそ動植物、森があってこそ人間、森があってこそ村や町、ということなのです。

こうしてみると、ブナの森の役割は、東北地方の「ブナの森」だけのことではなく、杉林でも何の木でも同じだということが分かってきます。日本中で、スキー場やゴルフ場に変えられてしまった森、「はだかやま」にされてしまった、かつての森があります。

最近では日本中で洪水被害が頻発しています。ちょっと雨が降ると辺り一面が水浸し。多くの水田がみな宅地や駐車場に変わったことにもよりますが、それよりもっと上流の「はだかやま」が最大の要因でしょう。

この課は読み手に、ゴルフ場やスキー場が無制限に広がっていく日本の現実に目を向けさせ、猛省を迫ることを目的としたものなのでしょう。私なども、教員になってからでさえワンシーズン最多で45日もスキーに出かけるスキー狂だったのですから、猛省を余儀なくされます。私個人にとっても、とても辛い課ではありました。

また、こうした環境の変化が引き起こした温暖化によって、日本中が熱帯化していることも、最近とみに頻発するようになった集中豪雨の原因ではありましようが。

また同時にこの課は、2011年の東北大震災の後に読むと、また違った物語として読むこともできるのです。と言いますか、最も死者数・被害者数が最も多かった宮城県。死者 9,540、行方不明 1,223、計 10,763、負傷者 4,145、合計 14,908 です。このブナの森はあの震災でどうなっているのだろうか、この宮城は震災の後どうなっているのだろうか、と。

宮城県はとくに津波の被害が大きかったが、じつは津波については、自然災害伝承碑が各地につくられ「これより下に家は建てるな」などの警告文が書かれていたそうです。しかし時間の経過とともに忘却された例が多かったことが、今回の震災のひとつの原因でもあったという。詳しくは、ウィキペディアの「自然災害伝承碑」をご覧ください。

今の高校生・中学生は、もはや2011年の東北大震災のことも、小さかった頃のことであまりよくは知らないという世代に入ってきているからこそ、こうした震災のことも知らせておく必要があるのかも知れません。

しかし、授業中にはなかなかそこまで詳しく語る余裕がないことが多いのも現実です。が、教師がそういう思いを持ってこの課に接することで、生徒に与えるインパクトも違ってくるのではないかと思います。また、もともと教師はすべてを教えようとか、生徒が聞きたくもない

のにすべてを語ってはいけないのであって、生徒から質問があれば答えることができるということこそが必要なのですから。

L10 「My School Days」 — 「長生きせえよ」と手塚を励ましてくれた明石が、戦争に征き、長生きできなかった

漫画家・手塚治虫の青春時代の物語です。各セクションには手塚の漫画がたくさん載せられているので、発展問題は最後のセクション5のみしかなく、「この物語のタイトルをあなたなら何とつけますか。」というものです。

小さい頃、手塚は背が低くて弱虫で、小学校の同級生たちに馬鹿にされっぱなし。泣いてばかりいる泣き虫だったので、手塚泣虫というあだ名で呼ばれるほどだった。本名は治なののに、なぜ手塚治虫なのかという説には、虫が好きだったといういろいろな説があるが、逆転発想の意味で、この頃のあだ名「泣虫」をとって自分の芸名「治虫」としたのだったのではないかとこの課を読むと思わされる。

このストーリーは手塚自身が語るという形式で描かれている。みんなに馬鹿にされていた手塚だったが、ただひとり友人ができる。それが明石という学校一のタフガイ。心優しく、手塚をいつも「長い生きせえよ。長生きして漫画を描き続けろよ」と励ましてくれた。

そんな明石に赤紙が来た。終戦まであと1年の1944年のことだった。しかしその後、明石は戻らなかった。聞き伝えによれば、明石は戦いの最中にも手塚の描いた久美子ちゃんの漫画を肌身離さず持っていたということだったそうです。

発展問題の問いに対して、「手塚と明石の友情」とか「手塚の青春」「明石の青春」「戦争と青春」などと答えてくれる人も多い。それはそれで解答としては当を得ているのですが、私はどうしても語らずにいられなくなる。

当時はね、学校は男女別学だったのよ。男の子は女の子と言葉を交わしたこともない。すれ違っても話もしたことがない。女の子の手も握ったことのない男の子たちが戦争に借り出されたのだ、と。明石も、現実の女性ではなく、手塚に描いてもらった久美子ちゃんを、自らの恋人のごとく肌身離さず戦場に赴き、そして二度と帰ってこなかった。「長生きせえよ」と言っていた明石が戦争に征き、長生きできなかったのです。

戦争中にはこうした悲惨な話は後を絶たないのですが、生涯一度も女性を知らずに死ぬのはあまりにも可哀想だということで、赤紙が来てから急遽結婚をさせるということも後を絶たなかったようです。良く言えば、銃後に愛する妻を残して征くのだから、必ず帰ってこいよ、との意を込めている、とも言えるのですが、せめて一度は男になってから死んでくれ、というそういう意味も込められていたのだと思います。

男にとっても、死に行くというのは想像を超えるほど辛いことですが、女にとっても、たった数日夫婦として連れ添うだけで夫が戦死でもすれば、それから以降の人生をどう生きればいいというのでしょうか。あまりにも男中心の考え方、あまりにも酷い仕打ちとしか言い様がありません。

2019 夏のワークショップと宿泊セミナーでこの L10 の話題が出たのは、鹿児島から参加の住田利香さんが、美しいお菓子「知覧茶唐芋ベイクドスイーツ」を参加者のみなさんに配られ

た直後だったのです。

知覧（ちらん）と言えば、知覧特攻隊基地です。私は神山征二郎・監督の映画『月光の夏』をすぐに思い浮かべました。（征二郎という名に「征」の漢字が入っていることに注目。当時、男は生まれたときから戦争で征く〔＝死ぬ〕運命を背負わされていたのです。）映画の舞台は鹿児島県の知覧基地ではなく、佐賀県の目達原（めたばる）飛行場なのですが、特攻隊基地であったことに変わりはありません。

出撃前の最後の思い出にと、基地からピアノのある小学校まで線路を徒歩で走りに走ってきて、ピアノを弾き、そして戦死してしまった若き特攻隊員の実話をもとに描いたドラマです。

生きては帰れぬ出撃を前に、どうしてもピアノが弾きたいと、一人の青年はベートーベンのピアノソナタ『月光』を、もう一方の青年は『海ゆかば』を弾いて基地に帰っていった。

二か月後に戦争は終わった。特攻隊基地から飛び立ち、『月光』を弾いた青年は帰らなかった。

飛べる状態ではない壊れた飛行機や、エンジン・トラブルの飛行機に乗らなければならなかったり、だから標的に到着する途中で墜落したり引き返さざるを得なかった飛行機も多かったという。かろうじて基地に戻ると、「なぜ死ななかったのか」と尋問され、別の施設に監禁されたという。

目達原飛行場の碑文には、こうあるそうです。

目達原飛行場は、昭和十八年陸軍太刀洗飛行学校目達原分校として開設され、以来多くの若鷲が養成された。

昭和十九年以降、戦局の進展に伴い特攻第二七三振武隊として

「若者よ後につづけ」を合い言葉に、

敢然として国に殉じ敵艦を求めて次々と飛び立った由緒ある地である。

L11 「Bicycles up Kilimanjaro」 —アフリカ大陸の最高峰キリマンジャロ（標高5,895m）を自転車で登る？

「アフリカ独立の象徴であり、ヘミングウェイが最高の賛辞を贈ったことで知られるキリマンジャロは、私たちにとって一度は登ってみたい憧れの山ではないでしょうか。頂上到達は決して容易ではありませんが、その感動は経験した人にしかわかりえないものと断言できます」（西遊旅行という旅行会社の宣伝文句）といわれるほどの山です。

この課は、そのキリマンジャロにマウンテンバイクで初登頂しギネスブックに載った人物が書いた手紙文ということになっています。

英語の手紙の書式は決まっているので、まずそれを確認するのがセクション1の発展問題です。「この手紙の発信人、受信人、発信日、発信地は？」

セクション5の発展問題は、「次の日付にしたがって筆者の行動を印なさい。」

この2つの発展問題を解こうとすると、手紙全体をもう一度しっかり読み直さなければならなくなる、これが味噌なのです。

「この手紙の発信人は？」の答えには、驚くなかれ Kenya が出てきます。国名のケニヤではなく、人名のケンヤ（たとえば健也）などを思い浮かべてしまうのでしょうか。あるいはタケ

シが出てくることさえあります。

それでいて「受信人は？」には、Dear があるのでタケシと書きます。私は「発信人と受信人が同じなの？」と問いたださねばなりません。

また、「住所と日付は右上に書くことになっているのよ」と言いますと、「えっ、知らなかった！」とたいがいの学生は言います。

いちおう教員は英文手紙の書き方は知っていますし、また、日常的な事務文書の形式は、日頃よく目にするので、これも割とよく知っています。

事務文書は、上から順に、「右上に日付、左上に宛先、その右に差出人、中央に件名、その下に本文（前文＋本文＋後文）、別記」というような感じでしょうか。

一方で、日本語の手紙の書式はきちんと教わったことがない、というのが一般的ではないかと思います。それでも、「拝啓（あるいは前略）、本文、敬具（女は「かしこ」）、日付、自分の名前（下方）、相手の名前（上方）」というような形式くらいは、いちおう知っています。（と言いましても、私自身は大学の作文指導でようやく教えられた、というわけですが。）

ところで津田塾大学では作文指導というものがありました。手紙とハガキの書き方ぐらい、いわゆる挨拶文、お礼文等の練習ばかりでした。

また封筒の宛名はどのように書くべきか、たとえ長い住所でも、なるべく1行に収まるように文字間隔をぐっと詰めて書けとか、日本語は「あなた」とかは使わない言語だから、主語は省けとか。

いわゆるお中元やお歳暮をいただいたり、ご招待を受けて帰ってきたとき、あるいは近況報告をするときに、どんな良いお礼状を出すか、といったものに限られていました。

今から考えると、とんでもない限定的な作文指導でした。論文の書き方はいっさい指導されませんでした。津田の卒業生は地方や中央の名刺と結婚することを前提とする教育だったので。

話は横道に逸れてしまいましたが、津田塾大学の体育の授業は「全人的教育」と称して、入学当初に水着を着てステージ上を歩かされました。A⁺からD⁻までにランクづけされてから指導されるというものです。歩き方、タクシーの乗り降りの仕方まで教えられたのです。

将来の大臣夫人や代議士夫人が大股をあけてタクシーに乗ってもらっては困るからでしょう。津田塾というところは、卒業時に半数近くがすでに結婚先の決まっている大学でしたから。

ところで、セクション5の発展問題は「次の日付にしたがって筆者の行動を記しなさい」です。これには、どの学生も目を白黒させます。

しかし問題には既に日付が順に記載してあるので、それにしたがって順にもう一度確認しながら読んでいくことができるしくみになっています。書かれている日付は次の通り。

12月26日、12月27日、12月31日、1月3日、1月4日。

これを解くカギは、セクション2のOn December 26と、この手紙の「発信地と発信日」です。それらを前の方から順に追いかけていくと、On December 26 (12/26、ケニヤのマランガホテルに到着) → early next morning (12/27、キリマンジャロ登頂へ向けてホテルを出発) → On the fifth day (12/31、マウンテンバイクから転けながらもキリマンジャロ登頂に成功) となります。

そのあと yesterday がきて、Well I'd better stop here. ...で手紙は終わります。

手紙を書いていたのが発信日なので、逆算すると here (1/4、ホテルで手紙を書いて

いる) ← yesterday (1/3、やはり転けながらの下山だったがスムーズで無事ホテルに到着) となるというわけです。

「日付と日付に関する語をマーカーで塗ると分かりますよ」と目の前でマーカーで塗らせませす。するとようやく、日付の欄を上記のように埋めることができるのです。

こうしてようやく、歩いてさえ登頂が大変なキリマンジャロを、なんとマウンテンバイクで成し遂げたという快挙の全貌を知ることができるのです。

この手紙は一種の「記録文」になっているので、こうした日付による全体像の把握が最も大切なことなのでしょう。

キリマンジャロをマウンテンバイクで登るといえるのは、今でも大人気のようで、Web 上にはたくさんの「自転車での登頂記事」が載っています。

L12 「The Story of the Wolf Girls」—世界中に無数にある野生児の物語のひとつ

セクション 6 の発展問題は、「下の表を完成させなさい」というもので、表は縦軸に年月日が、横軸にアマラとカマラの「年齢」「事件」の二列があります。

1920年10月、	アマラ (1歳半)、カマラ (8歳)、インド東部のゴダムソ村付近でシング牧師に発見される
1921年9月、	アマラ (2歳半)、カマラ (9歳)、アマラ病気で死亡、カマラ初めて涙を流す
1922年1月、	カマラ (10歳)、二本足で立ち始める
1922年3月、	カマラ (10歳)、膝をついて立ち上がる
1923年6月、	カマラ (11歳)、二本足で立つ
1926年?月、	カマラ (14歳)、約30語を覚えた
1929年11月、	カマラ (17歳)、死亡

年代順に記述された説明文なので、表を埋めてみようかと格闘することで、英文をもう一度読み返すことができます。

しかし年齢を入れるという段になると、何月生まれか分からないので、何歳かを確定することが非常にむずかしい。アマラは翌年に死んでしまうのですが、カマラは1922年1月は9歳か10歳か、1923年6月は10歳か11歳かを決めにくい。

1926年?月なので10月くらいとすれば14歳は確定できる。1929年11月もほぼ17歳と確定できるが。

こんな感じで年齢を入れようとするだけで、カマラを何月生まれだと仮定すればいいのだろうか、という疑問がわいてくる。

しかしそもそも、発見されたときに何歳何か月であったかは確定していないのだから、「ほぼ何歳」ということでいいのではないか、ということなのです。しかしこの年齢が学生たちにとってはいちばん頭を悩ませる問題となったのでした。

ここで面白い記事がある。梁井貴史は以下のサイト「“オオカミに育てられた少女”は実在したか——その動物学的考察」で、狼と人の乳汁の比較をして、「オオカミの乳汁成分は人間と比べて、脂肪は2.4倍、タンパク質は7倍、炭水化物(乳糖)は半分である。これでは人間の乳児は消化できず、吐きもどしてしまう」と述べている。

<http://web.archive.org/web/20090211124342/http://kgef.ac.jp/ksjc/kiyo/910170k.htm>

だとすれば、森下敬一医博が述べているごとく、牛と人の乳汁の比較を医学界は怠ってきたとは言えないだろうか。人間が飲んではいけない牛の乳汁を赤ん坊から老人にまで「健康に良い」と言い続けてきたのはどういうわけなのだろうか。

L13 「Winnie-the-Pooh」 — 誰でもこんな風に生きられたら、という憧憬？

もともとは息子クリストファー・ロビンのクマの人形を主人公にして、父の A.A.ミルンが息子のために書いた童話の、これは第二話。

セクション2の発展問題「ロビンを呼びに行ったウサギはどこから出たのでしょうか。」

プーさんはウサギのおうちでご馳走をいっぱい食べてお腹が一杯になり、さて帰ろうと玄関から出ようとしてました。が、お腹が玄関の穴を塞いで出られなくなりました。そこでウサギがクリストファー・ロビンを迎えに行ったのですが。さてどこから出たのでしょうか？という問です。

この解答は本文中のどこにも書かれていません。でもともかくウサギは家から出てロビンを迎えに行けたのです。さて、答えは？

ほとんどの学生は立ち往生しますが、たまにとてもシャープで「窓からだ！」というような答えを出す者もいます。そうなんです。入り口・出口はひとつとは限らない。裏口入学というのも昔はありました。

私など、ある意味で真面目一徹で、人生裏街道という言葉とは無縁に過ごしてきましたが、道はいろいろあるのだということです。それをこの年になってやっと知りました。

たとえば、今日のように、大学へ行こうとしても、奨学金という名の貸金を利用しなければ大学進学できないと思いついでいる人も多いなか、スポーツ推薦や指定校推薦など学費全額免除で大学進学が可能な大学もじつはとても多いのです。何を申しましょう、朝日大学も、法経学部なら、ほとんどが全額免除か半額免除です。

また、大学選びが人生を決めてしまうとばかりに、人生瀬戸際の気分立たされたり何浪もする人もいるのですが、一方で大学は入れるところに入って、その大学でトップに躍り出れば、大学院はどこにだって割と容易に入れてしまいます。

隆吉も、一浪して東大に入りました。一方で、同級生で二期校の富山大学に行った人が大阪市立大学大学院に入り、修了後すぐ和歌山大学教員になった人もいたそうです。

人生に選択は重要ですが、人生にはさまざまな「入り口」や「出口」があるということを知っておくことは、またとても重要なことでしょう。

「ウサギはどこから出たのでしょうか。」という問いは、考えてみれば、なかなか意味深長ではありませんか。

セクション4の発展問題「なぜ his eyes (複数) ではなく his eye なのですか。」

"A tear rolled down from his eye." のなかの his eye のことです。

これは英語の単数・複数のことを問題にしているので、答えは簡単で、「一粒の涙は両目からは出せない」「片目からだから一粒の涙なのだ」ということなのですが、ほとんど誰も答えられません。日本語と英語の数の概念の違いを見せつけられる1文です。

たんに食べ過ぎてしまったという自分のミスで、玄関の穴に填まって身動きが付かない、そ

れで 1 週間も何も食わずに穴に填まったまま出られない、「ああーあ」とため息ひとつ付けない不甲斐なさに、流石のプーさんも、わっと泣き出すこともできず、大粒の涙がぼろっと一粒落ちた。

そんな感じがよく出ている面白い 1 文でしょう。だからきっと反省もしていないので、また同じことをやってしまうにちがいないのです。性懲りも無いプーさんなのです。

セクション 5・6・7 はまるで **The Big Turnip** さながらに、プーをロビンが、ロビンをウサギが、ウサギをウサギの友人親戚が引っ張って、うんとこしょどっこいしょ。7 で、ついにプーは穴から抜けるのです。

Turnip を意識して書かれていることが見て取れます。**Turnip** は英語圏の子どもたちにとっては、本当におなじみの物語なのでしょう。

応用問題 (3) は「5 の倒置構文をふつうの語順にしてください。」

5 の文は **And on the top of them came Winnie-the-Pooh ... free.** です。

最後の文がこのように倒置になっているのも、**Turnip** とそっくり同じで、**Turnip** は以下のようになっていました。

And up came the turnip at last.

セクション 7 の発展問題 (1) は「**he said "Pop"**とあるが **"Pop"** というのはプーが言った言葉かどうか書きなさい。」

この **"Pop"** は擬声語で、プーが言った言葉ではなく、穴から抜けた音「ポンッ」とか「スポッ」という感じでしょうか。

(2) は「5 の文を絵にしてみましょう。」

これに対しては、絵は描けない！と言う者が多いのですが、「イメージ図でいいからね」というと、皆なんとか描いてきます。たまにはとても可愛い絵を描く学生もいますので、褒めてあげると照れて帰って行きます。

セクション 8 の発展問題

(1) 「穴から抜けてプーの気持ちを表している単語をひとつ指摘してください。」

(2) 「この物語を読んで気づいたプーの性格を書き出してください。」

さて (1) の答えは **humming** となるのでしょうか。食べ過ぎてあんな大変なことになってしまったのに、最終的には穴から出られたのだから嬉しくて仕方がない、反省よりも何よりも、ウキウキと、ロビンとお手々つないでお家に帰っていきます。ロビンも「**Silly old Bear!** (ドジクマ!) だね」とプーを見つめるのです。

(2) の答えは次のようになるでしょう。

1. 食べるのが大好き
2. 良く言えば、慌てたりしないでのんびりしている
3. 悪く言えば、先の見通しもなく思うままに行動する、性懲りも無い
4. 友達がたくさんいる。人に愛される
5. 無邪気でかわいらしい

物語の中の主人公ならこれでもいいかもしれませんが、現実世界では生きていくのはなかなか大変かも知れませんね。いや、こんな風に生きてみたいですね。こんな風に生きているのが、『釣りバカ日誌』の「ハマちゃん」や、『男はつらいよ』の「寅さん」なのかも知れません。ハマちゃんは本当に天真爛漫ではありますが、フーテンの寅さんは天真爛漫に見えても、じつ

はタイトルにあるように「つらい」のです。

L14 「Song for Nadim」 —チャリティとは、結局は売名行為ではないのか？

歌 Yann Anderson、発売 1987 年。UNICEF (国連児童基金) のチャリティソング (Charity single release for Unicef, United Nations Children's Fund.) であることが、タイトルの一部に UNICEF の文字が記載されていることでもわかります。歌も映像も Web 上に載せられています。

<https://www.discogs.com/ja/Yann-Anderson-Song-For-Nadim/release/2471397>

この課は大きく 2 部構成になっていて、前半のセクション 1 ~ 3 が説明文で、後半セクション 4 ~ 7 が歌詞です。発展問題は次の通り。

セクション 2 の発展問題 「**①** と **③** は同じことを反復して述べています。反復されている文を指摘しなさい。」

セクション 3 の発展問題 「この物語はナジムの語り A とその説明 B で構成されています。各段落はそのどれにあたるか、AB で指摘しなさい。」 **①** () **②** () **③** () **④** ()

後半の歌詞セクション 4 ~ 7 にも段落番号が打たれていますが、歌詞なので、**①**、**②** (リフレイン)、**③**、**④** という番号づけです。

セクション 7 の発展問題 (1) 「この歌では、その連によって Nadim が 3 人称(he)で扱われたり、2 人称(you)で扱われたりして変化しています。それを指摘しなさい。」 **①** () **②** () **③** ()

(2) 「この歌の起承転結を指摘しなさい。」

(3) 「この歌の脚韻を指摘しなさい。」

セクション 2 の発展問題から、前半の段落が **①**、**③**、**②**、**④** という順序に並んでいることがわかります。これはもともと **①**、**②**、**③**、**④** の順に並んでいたものを記号づけ問題集に編集するとき入れ替えたのですが、元の痕跡を残して段落番号を振ったことを示しています。

そしてセクション 2 とセクション 3 の発展問題をやってみて初めて、なぜ問題集にするときに **①**、**③**、**②**、**④** という順序に入れ替えたのか、の理由が納得できるのです。

ところで、このセクション 1 (**①**) とセクション 2 (**③**) のナジムの語りは、Song for Nadim の歌に挿入されているナジムの語り (とは言えこれはナジムの言葉を英語圏の子どもがナジムに成り代わって語っているもの) です。

ですからセクション 3 の文章 (**②** と **④**) は、教科書にするときに書き加えた説明文ということなのでしょう。

そこでこの問題集を編集する過程で、ナジムの語りだけをまずセクション 1 とセクション 2 で一気に読ませ、その背景を S3 で読ませるといった構成に変えたわけです。

セクション 4 ~ 7 の歌詞について。

セクション 7 の (1) の解答は、**①** (a little man, he) **②** (you) **③** (he) **④** (you)

この問題をやってみることで、この歌は、ナジムが 3 人称で歌われたり 2 人称で歌われたりしているのだということが分かるのです。

歌詞の地の文が **he** で歌われ、リフレインでそれを **you** にするというのはよくあることですが、3 連目は地の文なのに **you** になっています。

ということは、リフレインが起承転結の「結」だとしても、3 連目は限りなく起承転結の「結」に近い「転」ということなのでしょう。とはいえ、この歌の起承転結を考えるなら、次のようになるでしょう。

(2) 起 ① 承 ② 転 ③ 結 ㊤

中南米はアメリカの裏庭であると同様に、アフリカは欧州の裏庭なのです。

中南米はアメリカの"裏庭"として、長いあいだ植民地支配を続けられてきた大陸。政治的経済的に米国に干渉・搾取され続けてきました。現在のベネズエラ情勢を見るだけで、それが分かります。

それと同様に、アフリカはもともと欧州諸国が"自国の裏庭"として植民地支配を続けてきた大陸。ダイヤモンドやタンタルなど希少鉱物資源の宝庫なので、その領土の奪い合いを続けてきたのです。(今は、中国が植民地支配ではなく商売相手として、取って変わってきた印象さえありますが。)

この歌はエジプトの少年ナジムが主人公で、UNICEF のチャリティソングなので仕方ありませんが、これは何もエジプトの少年だけの問題ではないのです。イラクの少年、アフガニスタンの少年、シリアの少年、スーダンの少年、コンゴの少年、イエメンの少年・・・その国を列挙していくなら、どこまでも書き続けなければなりません。

しかし被害者は少年だけなのでしょうか。大人も同じではないのでしょうか。被害者は子どもだけではないのです。幼気(いたいけ)な子どもはもちろん大切にされねばなりませんし、戦争の一番の被害者ですが、女、老人、大人、男とても、みな同じです。私は「子どもを救え」のようなフレーズを見るとその欺瞞性に辟易するのです。

東日本大震災のとき、福島第一原発が爆発して放射能被曝が広がりました。このときも、「子どもには放射能汚染のない食べものを」ということを言う研究者(京都大学助教・小出氏)がいましたが、「放射能汚染のない食べもの」は子どもだけに必要なものではありません。すべての人に必要なのです。第一、家で子供用の食事だけを別に作るなんて現実的ではありません。アーサー・ビナードは「食べものがみな低線量被曝を人々に強いる化け物に変わってしまっている」(長周新聞)と語っています。「一億総実験動物とされているのだ」と。「子どもを救え」というフレーズはイカサマ・詐欺ではないのでしょうか。

これまでチャリティ・ソングで有名だったものには、USA For Africa がリリースした **We Are The World** (マイケル・ジャクソン作詞・作曲)、ジョージ・ハリソンの **Bangra Desh**、1984 年のエチオピアの飢餓救済の **Band Aide** など、多々ありました。

また 2014 年にはショーン・ペンがハイチ救済のチャリティ・イベント「**Help Haiti Home**」で 600 万ドル(約 6 億円)もの寄付金を集めました。しかしその多くが、本来の目的にお金が使われ、成果を上げたという証拠はないようです。

チャリティでお金を集めるのではなく、多くの人たちの意識を変える、世界の政治を変えるということこそが必要なのではないのでしょうか。そのために歌や絵画や小説や映画などが利用できるなら、大いに利用すべきです。それこそ芸術でしょう。

ポップスの王、マイケル・ジャクソンの **Heal the World** はチャリティではありませんでし

た。プロモ・ビデオでは、アメリカやアフリカ、中国や中東、東欧などで、内戦や政府による抑圧、人種差別や貧困等で苦しんでいる多人種の子どもが登場します。が、私はどうも好きになれませんでした。マイケルの生き方と乖離しているように感じられたからです。

マンデラ・コンサートはチャリティではなく人々の認識を変えたという点でこれまでのチャリティとは一線を画していました。反アパルトヘイト運動の英雄は、2008年まで米国のテロ監視リストにその名が掲載されていました。英国のサッチャー元首相も、マンデラがまだロベン島に拘禁されていた頃、アフリカ民族会議 ANC を「典型的なテロリスト組織」と呼んでいたほどでしたから。

27年間も牢獄に繋がれ、ようやく晴れて南ア大統領になったマンデラでしたが、しかし、そのマンデラも南アを南ア国民のものに変えることはできなかった。南アを新自由主義の草刈り場にしてしまっただけだったのですから。映画『遠い夜明け』やマンデラ・コンサートでマンデラを知って以来、その趨勢をずっと気にかけて期待していただけに残念なことでした。この顛末についてはナオミ・クライン著『ショック・ドクトリン：惨事便乗型資本主義の正体を暴く』に詳しく載せられています。